

# 小砂丘忠義の綴方教育、その「教育の事実」

飯 田 和 明

## 1 本稿の目的

筆者は「小砂丘忠義の綴方教育、その基底」<sup>1)</sup>「小砂丘忠義におけるプロレタリア教育の影響と「表現技術」指導」<sup>2)</sup>「小砂丘忠義の綴方教育、その構造—「自己」「他者」概念の検討を中心に—」<sup>3)</sup>において、小砂丘忠義の綴方教育に関する論考を発表してきた。従前十分な探索と議論がなされず、諸論者によって課題とされていた小砂丘の高知時代における活動と諸論とを詳細に検討することから、「小砂丘における高知時代の変化」を論点とし、彼がそこにおいて得た「内から外へ」という認識を重要なものとしてとらえ、小砂丘における「自己—他者」概念という軸を設定することによってその議論を展開した<sup>4)</sup>。

研究の成果を基にして、筆者は現在のところ次のように「小砂丘綴方教育の構造」を抽出・把握している。

「自己」と「他者」を一度「分離」する。

「自己」は「分離」された「他者」を「受容」する。

「受容」の際、「動く」ことが「自己」の側に生ずる。

この「動く」ことによって、「自己」は「新しい自己」となり、「創造」を生む。

小砂丘は8年8ヶ月の公立学校での教員生活の後、高知から上京して『教育の世紀』『鑑賞文選』『綴方生活』『綴方読本』等の編集に当たり、全国の子ども、教師らとともにその「教育の事実」を創造していくが、彼の様々な言動を歪曲することなく包括的に、現代において教育を考えていく上で生産的なものとしてとらえるためには、上記は欠かせない認識であると考えている<sup>5)</sup>。

これまでの筆者による研究は、主に小砂丘の個人史研究によって従来の小砂丘論の不十分な点を補い、その「綴方教育の構造」を把握しようとするものであった。それは、彼が他の人物から安易に影響を受けるタイプの人間ではなく、あくまでも自分の眼で確かめた現実、教育の現場からものを見、考えを進め、実行しようとするリアリストであったことにもよる。本稿では、これまでの研究の成果の上に立って、『教育の世紀』『綴方生活』や『鑑賞文選』『綴方読本』等において小砂丘が接してきた子どもの綴方の

実際、それに対する彼の評言、綴方諸雑誌を介して行われた、小砂丘と全国の子ども達、現場の教師達との交渉の様子をたどることによって、そこに上記「小砂丘綴方教育の構造」が実践されている様態を確認し、さらに、彼の綴方教育が創造し得た、彼が当時の日本における教育の場に現実に生起させたもの—その「教育の事実」—を、いくつかの観点から描き出すことを目的とする<sup>6)</sup>。

## 2 「小砂丘綴方教育の構造」の実践

### 2-1 出発点としての「日本武尊」の綴方

「一先づ綴方から一と考えると私は教壇に立つた。」(『教育の世紀』1926.9)という小砂丘綴方教育の出発点にあたっている「日本武尊」の綴方に関し、小砂丘は次のように述べている。

課題を出して生徒に書かしたことが一度ある。「日本武尊はクマソの子であつて、エゾを討ちました」—五年・M—と書かれたことがある。私は面白いと考へた。まづ形のうえに誤謬はない。そして始めて歴史を習つた子供として多少なりとも歴史的記述も出来てゐる。少なくともMとしては、其頭の中で何らか考へたらしい創作の跡を私は見た。之ならばみんな綴り方はやり得ると私は信じた。

Mが実際に習つたのは、「日本武尊は、天皇の皇子であり、クマソとエゾを討った。彼は、クマソのかしらである川上のたけるを討つときに、当時、やまとおぐなという名であつたが、川上のたける絶命のまえに、そのたけるの名をもらつて、日本武尊となつた。」(国定教科書第三期『尋常小学国語読本』1918の記述による)ということであるが、それを、Mはこのように綴方に表したのである。この綴方をもって、小砂丘が「面白い」「みんなやり得る」とみなした理由について、「小砂丘綴方教育の構造」を下敷きとして考えてみたい。

小砂丘はここで、このMがM自身の「自己」をもって、歴史という「他者」をMなりに認識し、それを受容している、と捉えている。そして彼は、その受容にともなう「動く」結果として、Mが「日本武尊はクマソの子であつて、エゾを討ちました」と表現したのだ、と見たのである。そこには、教えられたことをそのまま受け取ってそれを正しく記憶し再生する、といった生徒(こういう生徒は教師の「自己」をそのまま投影しうる、単なる対者である)ではなく、教わつたこと、学んだことを生徒自身の「自己」として受容し、また「自己」として表出する、教師にとっての「他者」が在つたのである。小砂丘はこの「他者」を認め、Mとしての「其頭の中で何らか考へたらしい創作の跡」を確認する。この「創作」というものは、歴史的記憶、記述の誤りとしては、小砂丘によってとらえられてはいない。それは「他者」の受容にともなつて「動く」結果において生じたものとしてとらえられている。ゆえにこの「創作」は、どんなに小さなもので

あれ、たとえ誤りであれ、それは貴重なもの＝「創造」として、彼には認知されたのである。そして、このことをもって小砂丘は「面白いと考へ」、「之ならばみんな綴り方はやり得ると私は信じた」のである。

## 2-2 他雑誌への批判、当時の綴方状況の把握

「作品に表はれたる現代綴方の功罪」（『綴方生活』1929.10）で、小砂丘は「かうした文章が堂々と、日本の大勢の子供達によまれる雑誌に模範文と銘うつて出てゐることに異議があるのである。」として、『少年倶楽部』誌の「少年模範文壇」について語っている。ここにある「親の恩」（推奨）という綴方は次のものである。

「お母さん、すみません。貧乏を知らながら、わがまゝを言つて」

新しい運動靴をだいて僕は低くかう叫んだ。

昨夕あんなに頼んでも、買つて呉れなかつたお母さんが、僕が寝てから、そつと此の運動靴を買つておいて下さつたのだ。あんなに叱つたお母さんが…。かう思ふと、何だか胸が一ぱいになつて、涙がほほを伝はつて落ちて来る。

「ざあーざあー」

井戸端で、お母さんが水を流す音が、静かに聞こえて来る。

これに選者の「真情が溢れてゐる。」との選評が付く、という綴方である。次にあげる小砂丘による評は、「子どもに対して」という意味では、また「貧困」ということを念頭においては、多少驚くべきものとなっている。

一体どこに「真情が溢れてゐる」のだらう。真情が溢れてゐるといへば、なるほどさうかとも思はれないことはない。しかし少なくともこゝに表はれた文にはそんなものは溢れてゐるとはうけとれない。しひていへば、親の心やりに対する世の子供達の、修身教科書的の反省はあるかもしれない。それにしてもそれは作者が語つてゐるものではない。何処の何人が語つたにしても、通用するものではないか。そんな真情なるものを我々は認めない。

また、「ガラスを破つた石田という生徒のために、怒れば厳罰に処する中田先生の前で、クラスの級友50名が皆立ってくれた」という内容の「級友の恩」（優等）という綴方

「石田！立て」

「はつ」

「貴様はなぜガラスを破つたのか…」

（後略）

選評「強い、きびきびした文だ。」

については、

なるほどいかにも「きびきびしてある」らしい。ところでこんな愚にもつかないこけおどしに「強さ」がこもつてゐようはずはない。一見いかにも痛快げに思はれる。怒れば厳罰に処するといふ中田先生のおめでたい訓誨が、何と振るつてゐるではないか。それを又、まづ正直にうけとつて感銘しきつてゐる作者の無批判さはなにごとだらう。作者は多分、中学生かと思はれるが、現在の小学校の綴方で、このあたりを低回してゐるものは極めて多い。

と、酷評しきっているのである。この後、小砂丘は次のように記している。

まづ生活を豊富旺盛にしてやることを忘れて、表現の指導に没頭してゐる傾向がないとはいへない。口ではいかに「自由にかけ」「思つたまゝを」「題がないとは何事だ」と、大声しつ呼してゐようとも、その実肝腎の子供の生活は、国定教科書と先生の頭とで規定されてしまつてゐる。そんな狭い範疇の中におしこんで、枝葉をいかにひねくりまはして見たからとて、所詮物になるはずはない。

ここで小砂丘が、「まづ生活を豊富旺盛にしてやることを忘れて、表現の指導に没頭してゐる」ことに、必ずしも第一に批判の目を向けているのではないことに注意しなければならない。彼が見つめているものは、より奥にある。それは「肝腎の子供の生活」そのものである。彼らが実際には何を学んでいるのか、時には知らず何を学ばせられてしまつているのか。そこに小砂丘の綴方を見るまなざしがあると思われる。上記の綴方に、またその評に対し、小砂丘がいらだちとも見えるほどの厳しい批判を行うのは、この綴方を書いている子どもたちが、知らず身につけてしまつてゐる範疇を自分で見直すことが全くできず、逆にその範疇に身をゆだねることによつてのみ、安定を得ているのを見るからである。この綴方には、「自己」から一度切り離されたところの「他者」がない。作中に他者と見えるものは、その場での「自己」を投影した対者でしかない。そこには小砂丘の綴方教育の構造における「他者」はなく、ゆえに、その「他者」の受容から生まれる「動き」はない。結果として「創造」を望むことはできない状態のままこの綴方はよしとされ、その指導は終わつてしまつてゐるのである。たとえ「貧困」という事態を前にしても、そのこと自体によつて自動的に何かを語り出すことに対して、彼は慎重であつた<sup>7)</sup>。

### 2-3 綴方指導の在り方

上記各節において底流する、小砂丘の「自己—他者」概念を軸とした「綴方教育の構造」は、綴方指導の在り方を念頭に置いたところの以下の文言にも認められるだろう。

七のもの、五のものを十に見せようとするところに文章技術があるのではない。十のものを七、或いは五の文章に表はしつくさうとする所に文章技法がこらされるのである。

七のものを十に書いた文。

十のものを七で書いた文。

それは書く人の心がまへの相違によつて見分けられる。書く人の心がまへを読み得るものは読む人の心がまへである。

技術としてのみ見れば、ゆがんでゐるがそのため真直に見せる効果をもつものがあり、技術としては凹ましたはずであるのに、それがために結果に於いてはふくらみの効果をもたらすこともある。生理的物理的に来る錯覚その他のものを技術は心得てゐる。  
(「技術考片片」『綴方生活』1934.9)

ここには、小砂丘の「書かれたものから読みとる」という強い自負を看取することができる。それは、文章技術に「他者性」を付したところの、それに相對してそれから切り離された「自己」を持したところの指導者による、「他者」の読みとりである。

こういった綴方指導に対するスタンスは、指導を受ける子どもや、共に指導に関わることになる、学校の現場を預かる「受持先生」に対しても向けられている。

要するに評は作品を通して作者に話しかけ、作者を納得させるためのものだから、作者の心ゆくまで反駁の余地を与え相共に語り合ひ得る性質のものが一番いいことになる。(中略) 評者としてはその作者をもつともよく知つてゐる受持先生が先づ第一の適任者である可能性が多いのだから、先生の評を見て第三者からとやかくいひ得べき問題ではないかもしれぬ。すなわち、その作者の最近の思想傾向を見ぬいて受持先生が下した評はたとひ第三者の眼にはどう見えても、そのときの子供のためにはもつとも凱切なものであると見るのが至当である。

(「児童文批評の吟味」『綴方生活』1931.4)

こんどはずゑぶんたくさん集まりました。ところが、よんでみると、言葉のいひまわし方や、一体のかきぶりが、子供とは思はれないやうに上手なのが、いくつもいくつもありました。けれども、そんなのに限つて、どうも書いてあることが本当らしくなくてその子供と話をしてゐる気もちになれませんでした。文はどんなにまづくても、作者の心もちが精一杯にでてゐるならば、私は、その作者とお話をしてゐるやうで大へんうれしいのです。ただ、言ひまはし方などのけいこは第二にして、自分の一生懸命の心を語るやうにしてほしい。(『鑑賞文選 尋常四年』1930.1)

小砂丘は、「他者」を見ない「自己」による一方的な考えをもつて、それを「作者」に

押しつけようとはしない。また、彼は自らの実践と関わる場所に「綴方指導における学校の受持先生」という存在を明確に位置付けている。その上で「相共に語り合ひ得る性質」の評を志向し、受持先生の日常の指導を通して「作者の心もちが精一杯にでてゐる」作品をともに読めることをもって「お話をしてゐるやうで大へんうれしいのです。」と、率直に伝えるのである。投稿してくる子どもにとっても、またその指導に当たっていた教師にとっても、小砂丘はその持される「綴方教育の構造」の実践において学んでいくことのできる教師であったのだと思われる<sup>8)</sup>。

### 3 小砂丘綴方教育、その「教育の事実」

#### 3-1 連携と継続

小砂丘は、自分らの雑誌についての特徴と自負を、直接に読者に向けて語っている。

君たちの作品については、僕は、元より、他の選者の方々も、出来るだけの注意と努力を払つてゐる。本誌は、君たちの作品に最も重きを置いてゐるから、この点では数ある雑誌の中で、たしかに異彩を放つてゐるものである。それのみでなく、たしかに無類の境地をもつてゐるものだと考へてゐる。また、それだけまじめであつて、君たちの好奇心をつ（釣）つて喜ばせるやうな記事はないけれど、安心して投稿し、安心してよんでいい雑誌だと思つてゐる。そこに本誌の特徴があるので、（中略）ひるがへつて、このごろの、いはゆる少年雑誌なるものを見ると、いづれも競うて少年の心をつらんとするものばかりである。その記事にしても、挿絵にしても、しだいにいけなくなつてくる。ただ、争つて売らんかな主義に走つてゐて、教育的な心づかひなどは、まるでないのである。

（「通信」『鑑賞文選 高等科』1929.3）

これは読者である子どもたちを対象に書かれた文章である。小砂丘は、自分たちの雑誌の趣旨を理解してもらい、同じ方向を向いて共に歩む人として、彼らに接しているようである。

一方、小砂丘は先生や家庭に対しても、次のような文言をもつて通信している。

本誌にのせる一般の読み物や、鑑賞材料、漫画や挿絵、児童文、詩などには、十分、教育的考へをはらつて採択してゐるつもりです。児童作品に対する批評も、単なるおごなりを避けて、その学校、その子供としての立場から、将来の成長発展を考へてしてゐます。この点、他の商品としての雑誌とちがつて、子供には多少、とりつきにくいところがあらうかと存じます。従つて、先生方や、家庭の方々に、これについて適度のご指導をお願いしなければなりません。

児童作品をお送りください。それも一回や二回でなく、少し、継続して送つてい

ただきたいと思ひます。でなければ十分に子供に即した紙上指導ができかねるから  
です。 (「先生・父兄の方々へ」『綴方読本 尋常二年』1934.2)

ここには、小砂丘が自らの教育活動を学校外からの教育活動として意識しつつ、「その  
学校、その子供としての立場」を大切にしながら、各学校の先生、家庭と「連携」して  
いこうとする姿勢が表されていると言える。

また、こういったやりとりからは、「継続」という小砂丘綴方教育における重要な要件  
を読みとることができよう。この点に関しては、その交流を示す次のような史料が参考  
になる。

三重県伊曾島校のみなさん 前にくらべて、今度は、ぐつとよくなりましたね。  
何を書かうかといふことが、今度の文でははつきりわかつてゐます。みんなまじめ  
な書きぶりです。(後略) (「今月の綴方」『鑑賞文選 尋常三年』1930.1)

これはある学校に対する継続的な関わりを願い、それを実際に持っていることを示す  
ものである。また、

長い間親しくしてきた高二の諸君とはこの三月でお別れするのです。で、諸君の  
芳名を集めて読者名簿を作りたく思ひます。(後略)  
(「お願ひ」『鑑賞文選 高等科』1930.1)

には、卒業生に対する「継続」を、

(高等科生徒) 久しくご無沙汰しました。この同兄から、高等科の鑑賞文選をいた  
だいてなつかしく思ひました。六年生の時、友達のや自分の文章がのつてくるのをた  
のしみにしてゐました。又、これから、これに出すことが出来るやうになりました。  
毎月送つてください。私も一生懸命に文章に励むつもりです。みなさん私も仲間  
に入れてください。

(小砂丘) 久しぶりですね。中井先生もいらつしやるですか、またあのころのやうな  
綴方や歌を見せてください。(「談話室」『鑑賞文選 高等科』1930.1)

というやりとりにおいては、先生とのつながり、時間をおいての子どもとのつながり  
を見ることができよう。そして、子どもたちも、

(三瓶光子) 私どもはずいぶん長く文選を取つてゐますが、まだ、一度もだしたこ  
とがありません。何だか田舎者のせいか、はづかしいやうな気がするんですもの。今  
度友達方と思ひ切つて出してみることにして書きました。綴り方も詩もなつてゐま

せんが見て下さい。先生になほしてもらへることがうんとうれしいんです。また書いて送ります。

(小砂丘)田舎者などはづかしがつてゐてはいけませんよ。どんどんやつて来て下さい。それから、今度からは、談話室の原稿にも県郡校名をかいて下さい。でないと返事が出来なくて困ります。(「談話室」『鑑賞文選 尋常六年』1930.1)

といった交流に見られるように、子どもたちは雑誌へ投稿すること、それを読んでもらうことを喜びとしているのである。

上記史料に見える様態は、綴方に向ける彼の姿勢が「雑誌に佳作を選んで載せ、それを評価すること」を主眼とするものではないことを表しているが、それとともに、「子どもの発することばに返事を書く」ことを常に考えているような小砂丘に対する親愛と理解とを子どもの側も示し、その両者が双方向の関係を持ち、それを確認しながら共に歩んでいこうとする「教育の事実」が、彼の綴方の仕事によって、当時、形成されていたことを示しているものと考えることができる<sup>9)</sup>。

### 3-2 学校の内外

小砂丘の「文章技術指導」への眼は、一貫して高知時代から持されていたことは筆者によってすでに示されてきたが、この「文章へのこだわり」は、『国語読本』への厳しい見方としても現れている。彼は「座談会 国語読本 巻三を見て」(『綴方生活』1934.6)において「二年生の読み方 十 蛙」という課にふれて、

あさはかに改作したのだね。つまり、いろんなことを知ってはいても、思い切つて自分らしいものを主張できないので、こんなことになるのだよ。

文章はてんでなつてゐません。悪文中の悪文です。

と酷評し、

「オヒルカラ」は、オヒルカラ外へ出たのか、オヒルカラ正雄サンノウチへ行くつもりで実はおひる前に外へ出たのか、実にはつきりしない。こんな不用意な用語がこの巻には他にたくさんある。この課だけでも九十四頁—自動車ニノツテ来タラシイ三人ノ知ラナイラヂサンガ、立ツテキマシターもあいまい、九十五頁のアノ左ガハノウシロノ車—なども実に窮した用法だ。

など、いくつもの例を挙げて文章批判を展開しているのである。小砂丘にとって、子どもの綴方指導において「文章技術指導」を大切にすることは、もはや当然とされているところであったが、それはまた、当時の学校教育における「綴方の時間」においても指導がされていたことであり、高知での教員生活を経験している小砂丘にとって、それは



周知のことであった。ゆえに、彼が上記史料において意識しているのは、彼の営んでいる綴方の仕事、「学校外からの教育の仕事」であるということであろう。すなわち、彼はここで、「学校では『国語読本』という「教科書」を使って教育がなされている」という事態にダイレクトに目を向け、自分たちの仕事を「その外側にあるものとして意識していた」ということである。単なる『国語読本』批判、文章批判としてだけではなく、これらの史料を、彼の綴方教育によって現出した「教育の事実」を描いていくにあたって、「学校の内と外」という枠組みにおいてとらえていくための論拠として読んでいくことが可能であろう。

### 3-3 小砂丘綴方教育の広がり

最後に、最盛期に40万部という部数となった『鑑賞文選』に代表される、小砂丘等の創造した綴方教育の広がりに関連して、検討を加えてみたい。

コノ 綴方読本ヲヨンデキル子供ハ日本ヂウニ タクサンキマス。トホイカラフトニモ タイワンニモ ソレカラ マンシユウニモ キマス。ソノ オホゼイノオトモダチガ ドンナベンキヤウヲ シテキルカ ドンナアソビヲ シテキルカ、ミナサン、シリタイモノデスネ。ダタラ ミナサン ソレヲ ツヅリカタニ カイテ シラシテクダサイ。  
(『綴方読本 尋常一年』1933.2)

日本ぢゆうの、自分と同じ五年生六年生の友達が、今、どんなことをしてあそんであるだらう。又、どんな風に勉強してあるだらう、どんなお手伝いをしてあるだらう、どんな考へ方をしてあるだらうと、ひとの綴方をよむたびに思し起こしてください。(後略)  
(『綴方読本 尋常五年』1934.8)

東京は、今、さくらの花ざかりです。今日は四月の十二日です。あなたたちのところでは、どんなことですか、ときどき、そのおたよりを綴方にかいてしらして下さい。さよなら。  
(「みなさんへ」『綴方読本 尋常三年』1931.5)

台湾は台湾らしく、朝鮮は朝鮮らしく、そのくにぐにのおたよりを、綴方にかいてきかして下さい。  
(「みなさんへ」『綴方読本 尋常三年』1933.2)

ここに示されるのは、当時の日本全土にわたる、地理的な広がりとしての「教育の事実」である(読者は、樺太、満州から台湾にわたっていた)。また、小砂丘は、ある一定の場所(東京)を「中心」と見なすのではなく、それぞれの地域に生活する一人一人が「自己」を持したところの相対的な眼を持つこと、「グローバルな他者性」とでもいうべきものを、子どもたちに知らせているように思われる。

小砂丘は、その実践した綴方教育において、学校、教室とのつながりを、投稿された

作品が雑誌に「載る一載らない」といった範疇に限定しなかった。その現れは「選外作品に対しての評」を書くことにとどまらず、

毎月、雑誌にのらないかたの綴方の評もかくつもりですが、これから『教室新聞』といふのを出しますので、その方へのせることにします。『教室新聞』は、あなた方の教室へ、一冊づつ、さし上げます。

(「今月の綴方」『綴方読本 尋常四年』1931.5)

といった仕事にまで及んでいた。また、郷土社は「代理部」によるカメラ、紙などの通信販売などを手がけており、出版としても『綴方読本』に載った作品から『年間児童文集』を編み、また、卒業生徒に向けた『第一歩』を編集するなど、『綴方生活』誌を中核にしたその教育活動は、従来とらえられていたものよりも遙かに大きく、多岐にわたり、充実したものとして、全国に広がり、全国を「交通」して、その「教育の事実」を形作っていたと考えられる。

#### 4 研究の意義と課題

以上、本稿においては「自己－他者」概念を軸とした小砂丘忠義の「綴方教育の構造」が、どのように子どもや教師、学校といった場実際に現れ、広がりを持ち、「教育の事実」を形作っていったかについて、その一端を描き出してきたが、そこには現代の教育を考えていくためのいくつかの視点が含まれているように思う。

小砂丘の取った立場は、民間教育運動の立場から学校教育への連携を図るものであった(ゆえに、彼の教育活動を直接、現代における教室内での作文指導に反映させる云々の問題として限定的にとらえることは適切ではないと考える)。「全国から集まった、書かれた文章を介しての遠隔による教育」を小砂丘はその「綴方教育の構造」をもって行い、その活動によって全国にわたって創造された「教育の事実」をその活動の中において確認しつつ、さらに新たな「教育の事実」を創り出していたのである。

小砂丘たちの教育は、学校の外側からの民間教育運動が、学校の内部、教師、子どもたちの教育の現実に深く食い込み、つながりを持っていったことを表す「教育の事実」の一例である。翻って、今日において、民間の教育機関とはどのようなものを指すのか。それはどのように学校、教師、子どもたちに関わっているのか。それはどのようなメカニズムをもって興隆し、存続しているのか。そういった現代における「教育の事実」をうきぼりにし、その在り方を振り返ることによって、現代における教育の現実的課題を見定めるためにも、小砂丘忠義の綴方教育、その研究は、有意味なものであると考える<sup>10)</sup>。

小砂丘の雑誌は彼の生涯の終わりをもって終刊となったが、この時期に発生した生活綴方教育、生活綴方運動の興隆とその後の衰退は、何に原因するものなのか。小砂丘の持ち来たった「教育の事実」とは、爾後の諸綴方雑誌に、また教育史の中にどのように

受け継がれているのか。この件については、小砂丘研究を核として、それ以前、芦田恵之助、鈴木三重吉を含め、同時代また以降の綴方教育実践者についての広範な調査と考察が必要である。そのことにより、ある「正しい」と思われる問の提起とそれによる実践が、どのような筋道をたどって異なった方向に進むのか、また逆に、ある特定の価値観を代表するところから現れてきたと思われる事態が、何故にいつの間にか大きな支持を得て、それが「教育の事実」を形作ることにつながるのか。教育という場における「問の共有のされ方・大衆化」という問題についても検討していけると考えられる<sup>11)</sup>。そして、そこには日本の教育における「自己—他者論」についての研究成果を反映させる必要があると筆者は考えている<sup>12)</sup>。

本稿では、小砂丘による子どもの綴方に対する評言と、子どもや教師、学校等との交渉に係る面に目を向けてきたが、さらに彼の創造し得た「教育の事実」を十全に語るためには、より詳細に「子どもの文章そのものと小砂丘の評言とが創り出していく事態」について見極めていく必要がある。また、『綴方生活』同人各人についても研究を重ね、「彼らの集合体としての綴方雑誌」という見方においての考察も加えてみたい。

## 注

- 1) 『人文科教育研究』第23号 人文科教育学会 1996
- 2) 『日本語と日本文学』第29号 筑波大学国語国文学会 1999
- 3) 『国語科教育』第47集 全国大学国語教育学会 2000
- 4) 筆者による議論の概要を「小砂丘忠義の綴方教育、その構造—「自己」「他者」概念の検討を中心に—」(前出)により、以下に記す。

筆者は、小砂丘の「自己をもつとは、自己を認めると同程度に他をはつきり見てゐる相である。多くの個の列ぶ中に立つ自己を見ることである。それをはつきり見て始めて全的のものいひ方、見方が出来るものである。」(『眠らぬ寢床』『教育の世紀』1926)という文言や、小砂丘個人史における「別れ」「死」というものが彼の進めていた仕事の上に影響を及ぼし、彼を教師として出発させ、教育への確信を持たせた事情に通じていたことの論証から、彼の強烈な「自己」に対する「他者」の出現を見だし、

小砂丘における「自己」とは、自分を赤裸々にさらけだすような「自己」ではなく、また、前近代的な封建制度の残存によって未だ覚醒されずにいる者たちを目覚めさせるところの「自己」でもなかった。それは「他者との関係に在るところの自己」である。そして、その「他者」とは、「自己」とは「別れ」たところの、「自己」と分離した「他者」である。

ことを指摘した。また、

小砂丘理解において、従来、重要な表現として引かれることの多かった、「自己といふ個の発見」(『私の綴り方生活—教壇に立つて—』『教育の世紀』第4巻第9号1926)とは、この「自己」と「他者」の分離の後においての、「他者との関係に在る」ところの、「他者を受容」しての、「自己」という個の発見、という意味に解さねばならない。「自己」という枠内のみにおいて、小砂丘の「自己」ととらえることは、そこに恣意的な解釈を介入させるという結果を招くおそれがある。小砂丘の「自己」概念は、「只低級な、現実の快樂主義の自己中心の何時迄たつても地上を這つてゐるばかり」(『若き教育者に送る』高知時代研究発表資料 発表年月未詳)といった、「自己中心」の、「自己に密着してしまい、それに気づかずにいるような自己」からは、遠く離れたところにある。同時に、小砂丘の「他者」概念は、「自己を投影した他者」、他者理解を叫びながらそこに「投影された自己以外見えてこないような他者」からは、遠いところに在るものである。

とした。

- 5) 国語教育研究における近年の小砂丘への言及例として、「作文による人間形成指導の無惨の一事例」(渋谷孝『教育科学国語教育』N0.600 明治図書 2001.1)を挙げるができる。

渋谷氏は「社会の生きた問題、子供達の日々の生活事実、それをじっと観察して、生活に生きて働く原則を吾も掴み、子供達にも掴ませる。本当に(ママ)自治生活の樹立、これこそ生活教育の理想であり又文法である。吾々同人は、綴方が生活教育の中心教科であることを信じ、共感の士とともに綴方教育を中心として、生活教育の原則と方法を創造せんと意企するものである。(雑誌『綴方生活』第二巻第十号昭和五年の「宣言」より)」という、小砂丘等同人による生活綴方教育成立の事情に触れる「宣言」の一部を引用し、

児童に「本当に自治生活の樹立」をさせるには、指導者の一定の定見が必要である。しかしこれは非常に難しい。

とする。ついで、「教育の煙幕的効果」(『綴方生活』1931.3)にある「よくばりぢいさん」という子どもの綴方と、それに対する小砂丘の評言を挙げ、次のように記している。

ここでは、この児童の文章を添削する視点がほとんど無い。小砂丘は、老爺と運転手をきわめて形式的に対比している。運転手は「小ブル」(ささやかな資産階級という意味か)であって、「老爺」は「世の下積みになっている」人であるから同情すべきものだという見方である。一九三〇年代だとしても、職業の違いによる逆差別になりそうな見方がある。

小砂丘は、ここで、子どもの綴方から当時の社会の実相を見ようとしており、そこに看取った事態に対してのコメントを述べているのであり、彼の評言が直接的に氏のいうような「添削」を志向して書かれたものではないことを、まず確認しておくべきであろう。実際、彼は同年4月号の『綴方生活』「児童文吟味の問題」において、「社会認識の希薄な子供に向かつて、負担しきれぬイデオロギーを強注しようといふのではない。」と述べ、「てじな」という尋二男子の綴方について、具体的な言葉を尽くして4点についての評言を記している。渋谷氏の小砂丘の取り上げ方は、

学校における一斉学習としての作文指導とは、児童生徒が各種各様の文章を書けるような手立てを教えることである。もちろん文章を書くためには、書き手の考え、立場が関わるのは言うまでもない。だからといって、それが作文指導の第一義的な目標にはならない。人間形成などということを第一義的な目標にすることは危険なことでもある。書くことの手立て、書いた結果の吟味によって、ものの見方は養われるのだという立場を取るべきである。

という、この論における限定された立場に基づいての主張をなすために、小砂丘の限られた論文の一部を引用して性急な解釈を施してしまっている。事実として、小砂丘は高知での教師時代から、その文集活動等において文章記述に関する丁寧な指導を行っており、さらに上京後には『文章記述の常識』(高知県立図書館蔵)という著書までも著している。また、彼のプロレタリア思想との関わりについては、さらにその問題を「文章技術指導(への転回)」との関連という視点をも取り入れて論じられた一連の研究の蓄積が存在している。それらを包括的に取り上げ、「自己-他者」論を軸として解釈し直す試みを、筆者は「小砂丘忠義におけるプロレタリア教育の影響と「表現技術」指導」(前出)において行っている。

- 6) 『鑑賞文選』(1925 T.14 ~)。『綴方読本』(1930 S.5 ~)。『新生綴方読本』(1932 S.7 ~)。これらはいずれも、子ども向け綴方雑誌である。尚、滑川道夫『日本作文綴方教育史 3 昭和編 I』(国土社 1983)に、それぞれの創刊の事情、内容についての概略、同氏による国語教育史上の位置付けが記されている。

また、小砂丘とともに『綴方生活』の編集に当たった田川貞二氏は、

『鑑賞文選』については、小砂丘忠義が編集主任となった昭和二年には尋常一年から六年まで、各三十二頁でその半分を文学読物、あとの半分に児童文と児童詩をのせ、定価五銭、高等科用はその倍の六十四頁、十銭であった。その七冊が、毎月きちんと発行され、全国に広がり、最盛期には全学年の合計発行部数が四十万部にも及んだという。『赤い鳥』の六、七千部発行とくらべて、小砂丘忠義の編集する『鑑賞文選』が綴方教育界を直接動かす力がいかに大きかったか、想像できるであろう。(『綴方生活』復刻版月報第 10 号 1975.9)

と述べ、小砂丘の編集する雑誌が全国に広がり、大きな読者を得ていた当時の状況について記している。

- 7) 小砂丘は「飢に慣れたる者が果たして困苦欠乏に耐える力が大なりといへうか。之も少し疑わしい。滋味に最も飽満せる、順調に生き来れる者がより遙かに久しきに耐えるのではないか。」(『夜毎寄毎』『教育の世紀』1926.10) と言っている。彼の持っていたリアリズムとは、この種のものである。尚、『生活綴方教育における貧困の捉え方』については、後にも触れるように、現在においても誤った通説が流布しているということが出来る。
- 8) 筆者の言うところの「小砂丘綴方教育の構造」の実践を表すものとして、以下の例も挙げる事ができよう。小砂丘は、綴方を書くに当たり、まずは「自己」を持って「対象を写す」ことを求める。そして、「自己」から対象を切り離して「他者」として見、そこにおいて「動く」ことによって結果するところへと進ませている。

「かかし」という綴方に対しての評

(前略) この文は、むしやうにうれしがつて、かかしに石をなげてゐる少年のやうすがよくかけてゐる。小父さんに叱られてゐることもありさうなことだ。だが、それをそのまま書きつけただけの綴方である。石をなげてゐるのは電気人形でなく、生きた子供だ。だから、何か考え、何か、反省することがなくてはならぬ。したことをただ書き付けるのではなく、したことについて、どう心を動かしたか、その心の中をも書かねばならない。(後略)

「火事」という綴方に対しての評

(前略) これで満足せず—やうすを書くだけで満足せず—進んで心を動かして、たとへば○その火事はどうして起こつたか○どれほどものすごく焼けて、どんな損害があつたか○そのよるの火事で消防府の活動はどうであつたか○井戸の水がきれたことなどから考へて。消防設備に関する感想。などをかくやうになりたいものです。○—印の「悲しい」が二つあるが、はじめの「悲しい」はよくきいてゐる。後の「悲しさう」は作り事のやうでいけない。

(『綴方読本 尋常五年』1933.2)

- 9) 綴方教育における研究という範疇に属するものではないが、近年注目を集めた『文章読本さん江』(齋藤美奈子 筑摩書房 2002) には、数十頁をさいて作文教育の歴史に関する記述がなされている(『作文教育の暴走』)。その中に小砂丘等の仕事に直接に関わる次の文章がある。

ガリ版刷りの文集という小舞台で展開し、その内容と規模から『貧乏綴り方』と揶揄されることもあった『生活綴り方』にも『大舞台への道』は開かれていた。優秀な綴り方作品を選んで載せる『鑑賞文選』(のち『綴方読本』→『新綴り方読本』と改題)のような綴り方専門の雑誌もあれば、学年別に編集された『年間児童文集』『全国小学校児童文集』のような書籍も多数発行されていた。辺境の地でくすぶっている熱血教師にしてみれば、指導の成果を形にできる張り合いのあるシステムだったのではないだろうか。

ここには、「優秀な綴り方作品を選んで載せる『鑑賞文選』」といった、事実認識における誤りがあるばかりでなく、鶴見俊輔氏(『日本のプラグマティズム—生活綴り方運動』『現代日本の思想』岩波書店 1956) そのほかによって形作られ、中内敏夫氏による膨大とも言える着実な研究(『生活綴り方成立史研究』明治図書 1970 ほか) 等によって覆されるに至った、「生活綴り方」に付されていた旧来の誤った典型的な認識への安易な回帰が見られる。生活綴り方運動史上の過誤についての指摘が、日本における貴重な教育思想、実践の歴史を覆い隠す例については枚挙にいとまがないが、研究の進んだ現代においても、このようなジャーナリスティックな手法によって誤った認識が再度刻印されていくという事態が存在し、それらがまさに今日における「教育の事実」の一端を形作っているのである。

- 10) 例えば「社会力」(門脇厚司) といわれるものの欠如が指摘される教育の問題を抱える今日的な状況に、小砂丘研究はどのように参画しうるか。

社会に子どもたちが参加すること、社会的な営為に立ち入ることについての意識作りにおいて、現代の教育にその力が求められているといえるが、この「社会力」は、いわゆる学力問題(全体的なレベル向上、学力格差の問題等)においても、有効に作用すると考えられる(門脇『学校の社会力』朝

日新聞社 2002 ほか)。

現代の教育の場に生起する様々な意味での「教育のコンパートメント化」といった現象は、学習領域、学習集団、学問の目標意識等に現れているが、そこには、それ等を支える(例えば、学問の専門領域化、学校間格差と小集団・個別化教育、受験のための特殊なトレーニング教育等といった)現代における「教育の事実」が、その「地場の力」として働いていると考えられる。それらに対抗していく「教育の地場」、その持たれるべき力とは何か。そういった「教育の事実」を塗り替えていくための処方を得なければならないのが、今日の教育研究の課題となっていると考えられる。このような「社会とのつながり」という視点においても、小砂丘の綴方教育、その「教育の事実」を参照することができよう。

- 11) 生活綴方教育の興隆と衰退についての原因に関してはいくつかの考察がなされているが、これらは本稿で示された枠組みによって総合的に再考されなければならない。

興隆について

- ・大正7年三重吉の『赤い鳥』創刊から、教師達の間に、自分の指導した児童文を投稿して、その選評に一喜一憂するとともに、こどもの綴方指導に打ち込む教師が、全国的にでてきた。(田川：前出)
- ・国定教科書のある教科とくらべて、綴方にはそれがないということだけで、教師はある解放感を持って、自由な授業をおこなったのである。(中略)地方にいてコツコツ児童文を指導し、文集づくりにはげむ平教員の教育実践が認められ、全国的に「綴方人」と呼ばれる教師がぞくぞく出てきたのであった。(田川：前出)
- ・大正末期から昭和初頭にかけて、児童読み物尊重の風が学校教育におよんで、児童図書館運動もようやくさかんになり、課外読本・文芸読本・補充読本・鑑賞読本の刊行がおこなわれていた。(滑川：前出)

衰退について

- ・『綴方生活』創刊の昭和四年から、綴方教育界は疾風怒濤時代へはいつていく。千葉春雄主宰の『教育国語教育』が昭和六年四月創刊、同じ主宰の児童綴方雑誌『綴り方倶楽部』は昭和八年四月創刊、西原慶一主宰の『実践国語教育』は昭和九年創刊、百田宗治主宰の『工程』(改題『綴方学校』)は昭和十年四月創刊と、中央の教育雑誌は、菊池知勇主宰の『綴方教育』をふくめて、競争と勢力競合の時期となった。毎月の発行部数が二、三千部から五、六千部といった状況の国語・綴方教育雑誌が、ある程度の赤字に耐えながら、全国紙として競合しているのであったから、そのなかで『綴方生活』を運営している小砂丘の苦闘はたいへんだった。こどもの綴方投稿雑誌は、『赤い鳥』と『綴り方倶楽部』が全年共通誌で、菊池の『佳い綴方』と小砂丘の『綴方読本』は、小学校低・中・高学年向きが別々であったが、この方も競争であり、経営はかなり苦しかったのである。(田川：前出)
  - ・小砂丘は、親雑誌『綴方生活』に投稿する地方の教師に『綴方読本』を送って勧誘したり、子どもたちの綴方の投稿を積極的に依頼した。今井、井野川、門脇が学年を分担し、編集した時期(S.5～S.7)の内容が質的にたかまっていた。しかし、不況が反映して回収不能の誌代が漸増するにつれて経営難におちいった。(滑川：前出)
- 12) 小砂丘研究は、国語教育研究における「他者論」との関わりにおいても論ずることができるだろう。「自己－他者論」、とくに「他者」という用語の国語教育における扱われ方については、高木まさき氏によると、その概念を用いたのは田近洵氏であるとされている。([「他者」を発見する国語の授業]大修館書店 2001)。高木氏も自身にとっての「他者」の定義をしているが、それは主に西洋の哲学者や社会学者の概念から構成されたものとなっている。筆者は、その概念の内容や教育の問題への適応の仕方についてはおおむね賛同しているが、国語教育の歴史の中自体に、それを探索できるのではないかと考えている。小砂丘の論考は、この意味でも国語教育の一元流としてそれを見ることができるだろうし、現代における授業の在り方、そして、教育という場における「問の共有のされ方・大衆化」といった問題について考えていく際にも、有効な議論を生むことができるだろう。

(いいだ かずあき 筑波大学附属中学校教諭)